



^ 13
3325
10 #



門 13
3325
10

陳柳
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

# 積善家有餘慶

欽定彙編卷之拾



目錄

一 江列彙編の城下と欽定の事

長 彦田助次郎 秋田の領主を以ての事



大正八年八月九日  
木大學出版部 贈

款討彦根城巻之拾

口刈彦根の城りよて款討の事

長尾田助伊藤秋田の領主なるの事

めくろしめど 程よんぐいしよ 帯て志ざし  
ちりちり 口刈彦根の城りよちり ぬりぬり せねん  
まがたがまがたが ちんちん りり 年ねん 来の  
先多賢先多賢 の社の社 子子 借借 ぐぐ ちち ねね くく 年ねん 来の  
形かた をを 通と きき をを 入い りり とと 一い 玉ぎよ をを ここ りり て

新誓まことしつもの玉たま恒たねのううここららちち  
葉ちや辰とせよよヤヤままここままららくく臨たかのつらるる  
をおきか補おきかひい辰ちんららくく神しん佛ぶつ形がたをか思おもここ正ただ  
をまも護まもりり玉たまととぎぎららくくやや故こ婦ふ川かわ世よ所ところ  
左さ馬まのの知ち由ゆををそそ紙しぎぎ一いち日ひ直ちよくに  
臨まくく来きるるららくく也や女によららくく一いち夜よつつままととい  
原はらみみもも知ちららんん人ひと目めをを思おもふふ婦ふり  
編あままととててこれこれもも同おなくくいい葉はららくく一いち夜よ  
編あままととててこれこれもも同おなくくいい葉はららくく一いち夜よ

ららららくく一いち夜よ一いち辰ちんのの玉たま恒たねののううここららちち  
のの物ものよよままくくららららくく也や一いち夜よ一いち辰ちんのの玉たま  
よよままくくららららくく也や一いち夜よ一いち辰ちんのの玉たま  
遠ちめめ一いち辰ちんのの玉たま恒たねののううここららちち  
ままくく執とりりくく一いち夜よ一いち辰ちんのの玉たま  
ここららららくく一いち夜よ一いち辰ちんのの玉たま恒たねののううここららちち  
思おもひひくく一いち夜よ一いち辰ちんのの玉たま恒たねののううここららちち  
りりららららくく一いち夜よ一いち辰ちんのの玉たま恒たねののううここららちち

ともを牛をまきと幸うれば陰言  
ちくハ節作りたるは己ぬくいちと  
の用事一を幸ひよ高あのか佛  
活のものよりとん又こみおれゆき  
りづぬく出然つらやと号小婦川  
うらみづきえどもハ皇州相念よ  
まの徳者福多くの縁縁ありとま  
つゆとまきくまはくーげとまきを

ちちて  
まもんとすらおれぬと先几節を  
個あつとて臨よりーかんぐ  
よ進けんと身をゆきく欠生り  
おゆをえりうと志まてうの侍の  
編まうあうまてヤアまらると然  
ちの徳臣婦川と節なまの瑞り  
や別それちうはるはる田助之進どの  
島女国第一節夜の島れ形あり



さ  
さうりしを揮とぶらめらくと  
あいに北都と及びて飛鳥未結の旅  
年うあふをえ忘れしや十三  
心着を件ら類とよ依て戻田がま  
あいにさるる三人の中の成及老命  
うりもさるる魚うとどいひは鳥  
あふし仙合息まことあふし  
あ回が鳥を殺しするあ森を田

そのちりらとよまがしあうり  
そを討死するのれあうそを物  
てその場とあわし物きあ運  
を海とあふいんくよ  
合油が面をえ知るを幸いすあ  
供し今あまくあわしくと  
あふしあふさるるさう  
の飛鳥のあまきよりあまびり  
あふしあまきよりあまびり









あつるをしほをよつきらもゆりなし  
是をまよとあを投め一徳松  
とせ一とうぬらねはあつまはきは  
善しも徳一とは是らしと  
先八節念止一て三らばその言言  
葉遠いりらなとつ控て城中  
き一と名形らの路らい節作をを  
解きらくの着巻をか一つらね

も用を個きを古如も名一徳を後  
一用をとららくららと白小婦川  
ハつとまを伸て糸几ららあを引  
う也徳一止遠長句てまをら  
とと徳を八節似目早く引とあ何を  
一也くと引糸を控まらあと  
控しと切分れば八節派も出手念を  
て手を糸達と短小とらら小糸念



て旗使けしよむうひをめらひもよの志こころに  
て款くまよお合あひの城しろりをさうごうの  
ちしに名な取との山やま号ごう子こ郎らうを  
とごうとごうき仕し合あせよと一ひと乳ちし  
園いの中ちゆうへの移うつ使し遠とほ山やま下か  
らひの自みづか合あ違ちがひ女に儀ぎの事こと孝こう子しも  
りもいど却かへ年ねんよ名な後ご々々つひ先ま八はち郎らう  
の事こと本もとともよ後ご名な々々をさうとを志こころす

しとの差さ号ごうゆれば先ま八はち郎らう八はち郎らう儀ぎ  
多おほも恨うらむ合あひて園いの中ちゆうよ入いり  
る女にが後ごらよ折しくろり志こころうりとも移うつ  
城しろの事ことちねの款くま討うちつらとさうく  
より遊あそぶの儀ぎ人ひと遊あそぶよをせつら  
まり稿こう々々竹たけ書しよよ立た園いて整ととの府ふ  
の儀ぎよ名な取との老らう名な充ちゆう満まんるり  
そとたあましくおむり助すけ信しん郎らうを











七郎なまのきき美奈久馬と名を名  
て秋白美よきりちる内傳の歌集  
戸村七をまを討て三退なとのゆ  
老おのりひのりなとと伝よ存七  
をまら書うらびよ十之歳よあゆ  
娘然いよ伝て先達て歌討よ存り  
あゆとと伝よその歌を美奈久馬を  
七郎なまのきき美奈久馬と名を名

ゆよしうけち白うう戸村が書あ歌  
き四郎美奈久馬と名を名  
とと伝を美奈久馬と名を名  
即伊郎を名を名  
娘と娘れさ也渠が政目を願せり  
をたのりときは長父の伝を結せし  
因系あて戸村書子があをを  
流らうり名の名自四郎美奈久馬と名を名





厚き<sup>あつ</sup>の<sup>の</sup>衣<sup>の</sup>村<sup>むら</sup>十<sup>じゅう</sup>き<sup>き</sup>み<sup>み</sup>ら<sup>ら</sup>や<sup>や</sup>足<sup>あし</sup>を<sup>を</sup>め<sup>め</sup>り  
て<sup>て</sup>那<sup>な</sup>川<sup>がわ</sup>が<sup>が</sup>子<sup>こ</sup>も<sup>も</sup>那<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>静<sup>しず</sup>儼<sup>げん</sup>よ<sup>よ</sup>花<sup>はな</sup>め<sup>め</sup>る  
る<sup>る</sup>響<sup>こゝろ</sup>長<sup>なが</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>流<sup>なが</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>沙<sup>すな</sup>汰<sup>た</sup>め<sup>め</sup>り  
一<sup>いっ</sup>い<sup>い</sup>雨<sup>あめ</sup>沢<sup>ざい</sup>郎<sup>らう</sup>が<sup>が</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>火<sup>か</sup>上<sup>じやう</sup>に<sup>に</sup>る<sup>る</sup>ね  
川<sup>がわ</sup>の<sup>の</sup>水<sup>みづ</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>る<sup>る</sup>が  
あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>文<sup>ぶん</sup>明<sup>めい</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>一<sup>いっ</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>  
字<sup>じ</sup>人<sup>にん</sup>嘆<sup>たん</sup>賞<sup>しょう</sup>一<sup>いっ</sup>と<sup>と</sup>能<sup>のう</sup>一<sup>いっ</sup>星<sup>せい</sup>々<sup>々</sup>也<sup>や</sup>  
秋<sup>あき</sup>野<sup>の</sup>を<sup>を</sup>根<sup>ね</sup>影<sup>かげ</sup>巻<sup>ま</sup>き<sup>き</sup>松<sup>しょう</sup>之<sup>の</sup>松<sup>しょう</sup>年<sup>ねん</sup>

